

中国の子どもの読書—作家・彭懿氏が語る現在

2012年12月1日(土)

国際子ども図書館3階ホール

講師：彭懿氏

通訳：周龍梅氏

皆さんこんにちは。

今日は雨の中の御来場ありがとうございます。そして、国際子ども図書館からお招きいただき、皆さんの前で講演できることを、大変光栄に存じます。

本日の講演は私から見た中国の子どもの読書の現状について、というお話です。三つの観点からお話ししたいと思います。分かりやすく申し上げますと、一つ目は、親はどこで子どもたちの読む本を買うか。二つ目は、誰がどの本は良い、どの本が悪いと親や子どもたちに教えるか。三つ目は、子どもたちは現在どんな本を読んでいるのか、になります。

1. 親たちはどこで子どもたちの読む本を買うか

子どもの読む本は家庭で購入する

まず、親はどこで子どもたちの読む本を買うのか。本を読むというと、まずは手元に本がなければなりません。これは日本ではとても簡単なことで、図書館へ借りに行ったり本屋さんに行ったりすればよいのですが、中国では、本を読むことはやはりまだ大変なことです。

まずは「2011年度児童読書調査報告」を、見ていただきたいのです。この調査報告書は2011年4月20日の《中华读书报》(中華読書新聞)に載っていたものです。中国にはこのような読書に関する専門の新聞があります。とても重要な新聞で、大抵の大学や出版社はこの新聞を購読しています。この報告書はとても長いので、初めから終わりまで読んでいたら皆さんは退屈できっと眠ってしまうでしょうから、一節だけを読ませていただきます。(「児童阅读：购买力上升(子どもの読書：購買力の上昇)」《中华读书报》2011年4月20日 p.6“2011年度児童阅读调查报告”)

「第一に、子どもの読む本は主に家庭で**購入**しています。我が国の国民総生産(GNP)の成長と、児童書図書市場の繁栄に伴って、**95%**の家では、親が子どもの読む**本を買っています**。第二に、公共施設の図書館や学校の図書館から**借りて**読む家庭は、わずか**2%**です。」

第一と第二の数字は私が付け加えたものです。スライドの赤い文字の所を御注目ください。ここが日本と中国の違うところです。中国の子どもは**95%**の人が本を買って読むのです。

何年前か、私は宮沢賢治のふるさと、花巻にお伺いしたことがあります。遠い所、都会から少し離れた所で、多分農村なのかなと思いました。他のことは忘れてしまっただけですが、その図書館では、子どもたちが5冊まで本を借りられる、ということだけを覚えています。中国がここまで来るのには、まだ何年もかかるだろうと思います。

一つの調査報告だけでは説得力がないと言われるかもしれませんので、もう一つ見てみましょう。これも児童読書調査の報告です（「[新浪网“2011 儿童阅读调查报告 世界阅读日特别策划”](#)（2011 児童読書調査報告 世界読書の日特別企画）」）。このグラフでも、やはり親が買うのは94.7%ですね。

中国では図書館が少なく、さらに児童書の所蔵も少ない

皆さんは図書館で本を借りる人がこんなに少ないのかと不思議に思われるでしょう。若いお父さんお母さん、皆金持ちなので本を買っているのでしょうか。

もちろん違います。中国の図書館の数が少ないからです。例えば私が住んでいる上海を例にしてみると、上海の常住人口は2,300万人ですが、それに対して図書館は238館しかありません。つまり平均して10万人に図書館1館です。少ないでしょう。そして図書館の数はともかく、図書館に所蔵している児童書の部数は、更に少ないです。特に絵本の数はかわいそうなぐらい少ないです。

実際の例の一つを見てみましょう。皆さんもよく御存じの絵本《[野兽出没的地方](#)》（『[かいじゅうたちのいるところ](#)』モーリス・センダック作）です。私は日本には年に何回か来ますけれども、もう何年前からずっとこの本は本屋さんの目立つ所に置いてあります。今回もまた本屋さんで見かけました。中国では2008年に出版され、今年の10月までに、既に6万5,000部発行されました。

このように重要な絵本を、私は5種類のバージョンでコレクションしています。しかも中国で既に6万5,000部も発行しているのですから、図書館にきっとあるはずですよ。

それでは大きな図書館を見てみましょう、上海図書館です。おととい日本の国立国会図書館長を訪問した時に、副館長がちょうど上海から帰ってきたばかりで「先日上海図書館を見てきたけれども、立派なものですね」とおっしゃいました。どんなにすごいかというと、この写真でこの大きな建物を御覧ください。階段を下から上に登るだけでもくたびれてしまいます。日本の国会図書館を見たら、何か寂しいなあと思いましたけれども。こんな立派な図書館なら《[野兽出没的地方](#)》は絶対あるに違いないと思いましたが...

これは上海図書館のホームページです。全ての蔵書がここで検索できます。さっそく《[野兽出没的地方](#)》のところをクリックしてみますと、なんと「申し訳ありません、該当するものは見付かりませんでした」。私は信じられなくて、3回検索してみたのですが、確かになかったです。こんな著名な絵本がないなんて、驚いて私は頭を振るしかありませんでした。上海図書館は上海で一番大きな図書館、中国でもナンバー2なのに...

なるほど親たちは図書館に本を借りに行かないわけです。このような良い本もなく、行

っても無駄だと分かっているからです。

私はファンタジー小説をたくさん書きましたが、例えばその中の一つは、私も気に入っている《**戴牙套的青蛙王子**》(メタルブラケット (※歯列矯正用具) をつけた蛙の王子様) です。バージョンは二つあり、この写真はその両方のバージョンの表紙です。4年間で10万部売れました。中国の作家たちも印税が入ります。皆さんは、私が少なくともこの2冊の本のおかげで、昔話の最後に書かれるように、「それからいつまでもいつまでも幸せに暮らしました」と思われるでしょうが、インフレのため、私は1年間幸せになっただけでした。ここでふと私の本はどうか、と思い、心配になりました。上海図書館は私の本を所蔵しているでしょうか。検索しながら、もし上海図書館の蔵書目録に私の本がなかったら、1冊差し上げようと思っていました... すると驚きの結果です。あるばかりか、二つのバージョン、新版も旧版も揃っています。もうこれ以上、上海図書館の悪口は言いません。どうぞよろしく、これからも経費を落として私の本を買い揃えてください。

ネット書店がもたらした衝撃

よし、図書館に本がなければ本屋に買いに行こう。いずれにしても今の若夫婦は子どもが一人しかいません。一人っ子政策のため、もう一人産んだら罰金をたくさん科されるのです。今の中国の家庭では、両方のおじいさんおばあさん4人とお父さんお母さん2人で、6人が一人の子どもの面倒を見ますので、大事な大事な子どもの本を買うのにはお金は惜しまないのです。ところが財布にお金をいっぱい入れて、いざ本屋さんに向かおうとしたら、周りの本屋の姿が次々と消えていることに気が付きました。

これは私の話ではなくて、新聞に書かれたことです。今の中国の都会では、3歩も歩かないうちに銀行のサービスポイントがあります。しかし街をぐるぐる半分回っても、本屋さんはなかなか見付からないのです。北京新華書店の主席執行官によると、2007年から2010年までに、中国で民営の書店が1万店舗も減ったとのこと。《**中国文化報**》(中国文化新聞)という新聞の記者が、「読者の非劇」という題で、このような文化現象を冷やかしています。

こちらは雑誌《**财经观察**》(財經觀察) (第688期 2012年9月29日) に書かれた文章です。中国では今、従来型の書店がネット書店と対立しています。この記事によれば「従来型の書店は存亡の危機に臨んでいて、4年間に1万軒が倒産した」ということが書かれていました。新しくできた従来型の本屋さんにも倒産の波が押し寄せてきて、絶望的な、どうすることもできないスピードで広がって蔓延しています。このような笑い話もあります。「僕本屋を開きたいんだけど。」「ふーん。損してもかまわないなら開いてもいいよ。」

さて、従来型の書店はなぜ皆倒産して消えてしまうのか。理由はいろいろあると思います。やはり最大の理由は、ネット書店の出現がもたらした衝撃だと思います。これは日本と違うところです。私の聞くとところによると、日本では新刊本はネット書店にしろ本屋にしろ、割引はできないはず。中国にはこのような法律はありません。ですからほとん

どの人がネット書店で本を買います。私の記憶に間違いがなければ、私も、もう 5、6 年以上本屋さんに行っていないです。なぜならネット書店の方が便利で安いからです。便利なことは日本も同じで皆さんも御存じだと思いますが、どれほど安いかというのは、お話ししても皆さんは信じられないかもしれません。

ここまで話してくるともう一つ思い出したことがあります。中国には今もう古本屋はありません。なぜならネット書店の本の値段は古本屋のよりもずっと安いからです。とても安くて、皆さんが目を見張るほどです。

具体的に例を見てみましょう。これらはこの講演のために調べてきた実例です。よくある例で、特殊なものではありません。

私が翻訳したいわむらかずお先生の《14 只老鼠》(「14 ひきのシリーズ」) は皆さんよく御存じだと思います。子どもたちには大変人気のある絵本です。お見せしているこの画面は中国最大のネット書店の当当自营¹です。(なぜサイトの名前が当当自营 (タンタン) なのかというと、よく分からないのですが、多分本が届くときにドアをノックする音から来たのではないかと思います)。私が矢印をつけた所を御覧になってください。11,905 件のレビューがあります。本を買ってレビューに何か書くと、ポイントが付くのです。書かない人ももちろんいらっしゃるのですが、少なくとも 11,905 人の人がこの本を買っているということです。「14 ひきのシリーズ」第一弾の 6 冊セットの定価は 82 元 80 銭—小さく書いてありますね—普通の本屋さんの店頭で購入するならば、定価になります。割引はしません。しかし当当自营で買うと 53 元 80 銭になり、3.5 割も安いです。

先ほどお話しましたように、このシリーズは私が翻訳したものです。画面の上の方に宣伝文が書いてありますね。私がお父さんやお母さんに講演をするとき、どんな本が良い本ですか、と尋ねられることがあります。私は一言で言います。「私の翻訳する本が全部良い本ですよ。」自分で言っているだけではなく、出版社も私の翻訳本には、画面にこのように書いているのです。「彭懿先生が丹精を込めて翻訳しました」。

もう一つの例を見てみます。黒井健先生が絵を描いた『手ぶくろを買いに』(《小狐狸买手套》新美南吉文、黒井健図、彭懿、周龙梅译、南海出版公司 2010 年) は今日の通訳の周龍梅と共訳したものです。日本の児童書を共訳した作品は、100 冊以上になりますが、この本の原価は 29 元 80 銭、しかし当当自营は 19 元 70 銭。割引を知らないと困るかのようにはわざわざ定価の横に割引率を 3.4 割引と明記しています。若いお母さんたちが本を買うときは、大体この割引の値段を見て判断します。30 元ぐらいの本だと中国ではやはりちょっと高めです。

インターネットで本を買うのは大変便利で、出かける必要もなく、マウスをクリックすれば、翌日には家まで届けてくれるのです。しかし本当は近くに日本のような書店があれば、多くの方はやはり本屋さんに行きたいです。もちろん前提は、本屋さんの値段がネット書店の値段とあまり変わらないこと。私が思うには本屋さんの喪失はつまり生活の態度

¹ <http://book.dangdang.com/> (accessed 2013-4-13)

と生活の様式の喪失になるのです。とても悲しいこと、寂しいことです。

蒲蒲兰绘本馆（ポプラ絵本館）の活動

ここで特別な例を一つ挙げましょう。日本のポプラ社の投資で、7年ほど前に北京に建てられた蒲蒲兰绘本馆（ポプラ絵本館）です。本社は北京にあり、上海には支店が3か所あります。この絵本館には、中国では特別な意味があります。設計と発想は日本人によるものですが、その絵本館の設計あるいは発想も理念も、中国では良いモデルとなって、これに倣う人が続々と出ています。中国各地にある絵本館は皆、北京に来てこの絵本館を見学して真似をするのです。このポプラ絵本館は、既に中国の絵本愛好者の心の聖地になっています。若いお父さんお母さんたちは北京を旅行するとき、あるいは上海を旅行するとき、必ずここに立ち寄ります。世界の有名なエンターテイメントを紹介しているウェブサイト Flavorwire.com²で、去年発表された「世界で最も美しい書店 20 件³」に、北京のポプラ絵本館が選ばれました。ただしこのような書店はあまりにも少ないです。北京には1軒ではとても足りないのです。1,000 軒あっても足りません。

この写真は上海の支店です。きれいでしょう。上海の繁華街にあり、名所の一つとなっています。とても古い伝統のある建物で、場所代が非常に高いです。

ポプラ絵本館は本を売るだけではなくて、出版社でもあります。社長さんも、編集者の多くも日本人です。社長さんはもう中国滞在 16 年になりますが、中国が大好きです。ホームページ⁴に書いてあるように、ポプラの絵本館は7歳になります。ここでは絵本を販売するだけではなく、先ほどもお話したように、絵本を取り扱う理念をいろいろな方に伝えています。また、幼児期の読書を育む場所にもなっていて、毎週子どもたちのためにいろいろな読書活動を行い、親や子どもたちに来てもらっています。子どもたちのお母さんたちはこのポプラ絵本館が大好きで、あるお母さんはこのようなことをおっしゃいました。「私は時々子ども連れでここに来て本を読んだりしますが、ここは本がとても揃っていますし、雰囲気もすてき。私はやはりこのような従来型の本屋さんで本を買ったり読んだりすることが好きです。なぜならここでは子どもとコミュニケーションができるからです。」このポプラ絵本館の影響で、中国の多くの絵本を扱う専門書店や組織、グループがこのような活動を見習って行っています。ポプラ絵本館に対し私は最後に一言申し上げます。「本当に彼らの努力に感謝します。継続は力なり。皆で応援しましょう。」

貧困地区の子どもへ本を送る活動

中国は広く、貧富の格差が大きいです。多くの地方は小学校さえありません。子どもたちは何時間も歩いて学校に通います。こんな所では図書館どころではありません。ですか

² <http://flavorwire.com/> (accessed 2013-4-13)

³ <http://flavorwire.com/254434/the-20-most-beautiful-bookstores-in-the-world/> (accessed 2013-4-13)

⁴ <http://www.poplar.com.cn/> (accessed 2013-4-13)

ら最近多くの熱心な方たちが、このような地域の子どものために、本を寄付する活動を始めたのです。例えば私もこの活動の一つに参加しました。「点燃梦想基金」（希望の明かりを灯す基金）という活動です。299 品種の本を寄付したのですが、当時よく数えていなくて、もしきちんと数えていたなら、もう 1 種追加して 300 種類にしたでしょう。

この写真は図書寄贈証書です。私の作品、あるいは私は、かつていろいろな賞や賞状をもらいましたが、どこに置いたのか忘れてしまいました。しかしこの証書はいつまでも私の本棚に置いて大切にしています。

こちらの写真を御覧になってください。熱心なボランティアさんたちが、何日間もかけて列車に乗ったりバスに乗ったりして、山の奥の子どもたちの手元に本を届けてくださるのです。

2. 誰がどの本は良い、どの本が悪いと親や子どもたちに教えるか

背景 1 中国の子どもの本は出版ラッシュ

次は本の選び方、つまりどの本が良い、どの本が悪い、ということを経験が子どもや親たちに伝えるか、という問題です。言ってみれば、どこで本を買うのかというのは大きな問題ではありません。例えばネット書店でも買えます。

私が個人的に思うには、最も難しい問題は、中国では今子どもの本、児童書が多すぎるということです。なぜこのようなことを言うかという、中国は日本と違ってあらゆる出版社が児童書を出しています。先ほどの《中华读书报》（中華読書新聞）2010 年 1 月 20 日に、次のような報道がありました。「現在全国で児童書を出す出版社は、既に 512 社に上っています。そのうち 34 社が児童書専門の出版社で、児童書市場の 30%の売り上げを占めています。非児童書専門の出版社は、市場の 70%を獲得しています。」この記事では「市場の 70%を獲得」というところに「抢滩」つまり市場略奪、という言葉を使っています。

このことをもう少し詳しく説明しましょう。中国では専門的に児童書を出す出版社、つまり日本の福音館書店やポプラ社のような出版社は 34 社です。ところが中国では今児童書の売れ行きが良いですから、児童書市場はもうおいしいケーキのようになっていて、もともと児童書を出す出版社ではないところまで、このケーキの分け前にあずかろうとしているのです。それでさっきお話したように、全国で児童書を出版する出版社が、既に 512 社にもなったというわけです。

面白い例を見てみます。「中国電力出版社」、どんな出版社なのかというと、電力、技術、科学技術専門の出版社です。電力技術専門出版分野では評判のある所です。したがって《电力工程电气设备手册》（電力工程電気設備ハンドブック）、《电力系统设计手册》（電力システム設計ハンドブック）のような電力に関する専門書を出すのが普通です。ところが意外と児童書も出しているのです。これらの児童書は、電力とは何の関係もありません。正真正銘の児童書です。しかも優れた絵本、良い絵本です。御覧ください。このような日本の絵本は、全部中国電力出版社から出したものです（《圆圆的月亮》（『おつきさま』）やすいす

えこ 作、葉祥明 絵)、《我是谁》(『だーれ?』マルタン作・絵、河合重丸 訳)、《我和小狐狸》(『わたしときつねさん』こわたたまみ 作、いもとようこ 絵)、《谁的自行车》(『だれのじてんしゃ』高島純 作・絵)、《太阳公公》(『おひさま』やすいすえこ 作、葉祥明 絵))。今は中国のほとんどの出版社に児童書部門があるのです。

さて中国では児童書は、果たしてどのくらい出版されたでしょうか。中国の出版に関する最高機関は中国新聞出版署で、《中国新闻出版报》(中国出版新聞)を出しています。この話によると、中国はもう実質上、児童書出版大国となっています。先ほど2010年1月20日の記事で512社が児童書を出版しているとお話しましたが、しかし2011年11月19日に出たこの新聞によると全国に580社の出版社があり、その中の530社が児童書を出している(「中国少儿出版进入童书蓝海时代」《中国新闻出版报》2011年11月19日)とあります。先ほどまで512社だったのにもう530社になっているのです。それで皆でからかって、もう「挙国体制」だと言っています。2010年に出版された児童書は2万種、2011年にはもう4万種を突破しました。最後の一言に私は感激しました。「中国で出版された児童書の数は、アメリカに次ぎ世界第二位となっています。」これは私の話ではなくて、権威ある新聞で書かれたものです。

年間4万種も子どもの本が出版されているのです。こんなにたくさんの児童書を目の前にして、どれを選んだら良いか、親たちは確かに迷います。私も分からなくなります。ですから昨日の国際子ども図書館との交流会の中でも、どうやって中国から良い本を選ぶかということについて話し合いました。本当のことを言うと、私は、もう私の本を買うだけでいいよ、と言いたかったのですが、ちょっと恥ずかしくて言えなかったのです。本当に多すぎるのです!

背景2 全部が良い本とは限らない

ここでもう一つ例を挙げてみます。やはりネット書店の当当自营を見てみましょう。仮にある親が子どもにグリム童話を買おうとして、オンライン書店を開いてみると、なんと559種が出てきます。どれを買ったらいいのか、しかもうっかりすると、とんでもない本を買ってしまう恐れがあります。年間4万種の児童書が全部良い本とは限りません。

例を見てみます。皆さん御存じの、《逃家小兔》(『ぼくにげちゃうよ』マーガレット・ワイズ・ブラウン文、クレメント・ハード絵)というとても重要な影響力のある絵本です。アメリカ絵本の名作の一冊で、多くのお母さんに愛されています。私に来るまでに中国でこの絵本がどのくらい売れたのか、わざわざ編集者に電話で確かめましたが、彼の言った数字には私も驚きました。発行部数は50万部ありました。私の本は残念ながらまだこんな数字が出ないです。

しかしある日突然、つい最近のことです。突然このような本が出てきました。中国語のタイトルでは一文字違いの《离家小兔》(ぼくはなれちゃうよ)。よく似ていますね、この絵本です。作者は《逃家小兔》と同じく、マーガレット・ワイズ・ブラウンです。しかし

画家は取り替えられています。名前は三棵小树、「三本の小さな木」という意味で、名前を見れば、もう誰でも偽名だと分かります。本に載っている紹介文によると、絵本作家の本名は何、どこの大学を卒業、それからどこで仕事をしている、とあります。これだけでしたらまだ何となく許せるのですが、しかし中身を見ると、『ぼくにげちゃうよ』の原作と全く違うのです。御覧ください。先ほどのネット書店の画面に出ていたものですが、上のほうにその商品の説明がはっきりと書いてあります。問題はここです。スライドの赤字部分を御覧ください。「この度わざわざ、国内の優れた子どもの本のイラストレーターを招いて、本作品のために優しい美しいカラーの挿絵を描いてもらいました。」しかし、今「この度」と言ったのに、メディアの推薦欄には、「ニューヨークタイムズ 1972 年度の最優秀絵本、児童書最優秀作品」と書いてあります。明らかに「この度」と言っているのに、どうして 1972 年にこういう賞をもらえるのでしょうか、全くのでたらめです。2012 年に出版した新しい本なのにどうやって 1972 年の賞を取れたのか、まさかタイムワープしたとでもいうのでしょうか。昨日、国際子ども図書館の方と交流した時には、まだどうやって良い本を選ぶか思い付かなかったのですけれども、今ふと思い出しました。本を選ぶとき、出版社をきちんと見た方が良いでしょう。この出版社は聞いたこともない名前です。

しかし私が文句を言い出したわけではなくて、実は多くの親たちからすぐ疑問の声が上がりました。絵本に詳しい親たちのこのような声は、すぐ当当網のレビューに載って全国から見られるのです。当当網のレビューは、一ついいことがあります。良いコメントも悪いコメントも両方載せているのです。これは親が実際に書いた言葉です。スライドの黒い字のところを御覧ください。「この版の絵本はひどすぎる。全く原作に対する冒涇です。本を大事にする読者たちはくれぐれもだまされないように。」

11月6日、私が日本に来る直前ですが、このひどい絵本を再び当当網で検索しようとしたら一画面の青色のボタンに品切れとか、取り寄せとかと書いてあるのですけれども—そこに書いているのは、「大変申し訳ありません、お探しのページは見付かりませんでした」。消えてしまったのです。しかし多くの親たちは、もうこの本を既にもっているのです。ですから本を探すとき、気をつけないと、やはりこのような本を買ってしまう恐れがあります。

背景 3 子ども読書推進者の活動

ですから私の思うには、中国では本屋さんは大事なことですけれども、それより最も必要なのはどの本が良い、どの本が悪いと親と子どもたちにきちんと教える人です。このような人たちは「子ども読書推進者」と呼ばれています。10年ぐらい前までは、まだこの呼び名はなかったようで、ここ数年のうちにできた言葉です。彼らは自分のことを、子ども読書の点灯人（童年阅读的点灯人）と呼んでいます。皆児童書が大好きで、勉強好きでたくさん本を読んでいるので、良い本、悪い本をよく御存じです。これらの子ども読書推進者たちは、自分なりの方法で、一生懸命親と子どもたちに優れた児童書を薦めています。

彼らの狙いはうわべだけを追求する功利主義的教育が社会の背景にあるなかで、子どもたちに読書を好きになってもらい、読書の習慣を身に付けさせ、そして読書を基本的な生活様式の一部にする、ということです。

良い本を見分ける方法

方法1 読書指導書

方法その一は、読書マニュアル、読書指導書、入門書のようなものです。日本の本屋さんなら、児童書売り場のすぐそばに、このような本をたくさん置いているコーナーが必ずあります。何年か前までは、中国ではこのような本はまだないか、あるとしても少なかったのですが、今ではたくさんあります。このスライドでお見せするように、児童文学の読書を指導するような入門書、あるいはマニュアルが中国でたくさん出版されたのです。

上の2冊は私が書いたものです。皆さんによく見えないと困るのでわざと大きくしました。それぞれ、《世界児童文学：阅读与经典》（世界の児童文学、読書と名作）、そして《图画书：阅读与经典》（世界の絵本、読書と名作）です。特にこの《图画书：阅读与经典》は、中国で10万部発行されました。200冊ほどの世界で最も優れた絵本について書いたもので、親たちがこの本を買って手本にして、この中に書いた書名で絵本を選ぶのです。下の左（《图画书应该这样读》（絵本の読み方）も私の書いたものです。右側の2冊（《绘本之力》（『絵本の力』河合隼雄、松居直、柳田邦男 著 岩波書店 2001年）《松居直喜欢的50本图画书》（『松居直のすすめる50の絵本』松居直 著 教文館 2008年）は、どちらも松居直先生の書かれたものです。松居先生は中国で大変多くの方に慕われています。何回かにわたり、中国で講演なさったことがあります。

私の書いた本《图画书：阅读与经典》（世界の絵本、読書と名作）については、《父母》という雑誌があるのですが、そこの編集長がこう述べていました。「この一冊で私の長年の読書の習慣が変わりました。当初は好奇心から、この《图画书：阅读与经典》を買いました。...当初は仕事柄で購入したものの、その日から、この本は私の枕元に置く本、「枕元の本（枕边书）」になりました。長年本を読み続けてきましたが、この本を読んで改めて心が癒された感じです。「枕元の本」、すてきなほめ言葉でしょう。何かこの響きがいいな、私は気に入りました。それよりまた、この雑誌が良いのです。《父母》という雑誌が、10何万の発行部数がある優れた雑誌です。たくさんの親たちがこの雑誌を読んで、またいろいろな優れた本を知ることになります。

方法2 ウェブサイト

方法その二はウェブサイトです。今お見せしているこちらは、中国にある最も優れた児童書を紹介するウェブサイトだと私は思います。「红泥巴村读书俱乐部」（赤土村読書クラブ）⁵という読書クラブで、政府の背景のない個人的なウェブサイトです。このウェブサイ

⁵ <http://www.hongniba.com.cn/bookclub/> (accessed 2013-4-13)

トは、新しく出た優れた絵本や児童文学を、必ず自分のホームページに載せるのです。

スライドの矢印の所に御注目ください。「2011年、知っておきたい絵本100冊」。具体的に見てみましょう。100冊のランキングが出ています。(しかもトップの2冊は運良くいずれも私が翻訳したものです)。このようなリストがあれば、親たちが絵本を買うとき便利ですし、参考になります。ですから多くの親たちはこのホームページを読んでいて、そのリストに従って絵本を1冊ずつ買っていきます。

ここまでお話ししてきて、もう一つ思い出したことがあります。私の思うには、中国では幼稚園までの読書については問題ないのです。基本的に中国の子どもは、幼稚園までは良い本を読んでいます。世界の名作を読んで大きくなるのです。それに幼稚園までは、親たちもすごく熱心で、自分の子どもは将来必ず偉くなると信じています。しかし子どもが小学校に上がると、多くの親たちはあきらめてしまいます。しかも親たちはもう疲れて、全責任を学校に任せてしまうのです。ところが、中国の小学校の先生には一つ問題があります。彼らの多くは師範大学で児童文学に関する勉強をしていません。ですから後ほどまた述べますが、中国の子どもたちの読書に存在する問題は、幼稚園ではなくて、やはり小学校以後にあります。ですから「100冊の良い絵本」などをよく目にするのですけれども、「100冊の良い読み物」というのはなかなかありません。

方法3 講演

方法その三は講演です。中国では、子どもの読書推進者の講演会が沢山開かれています。中国の大学の児童文学専門の先生たちが、皆このようなことをしています。

けれども、ここではごく普通のお母さん、家庭の主婦がやっていることを御紹介させていただきます。こちらは孫慧陽（孫慧陽）さん。彼女は自称、幼児期読書実践者です。こういう普通のお母さんが、親とその子どもたちに100回以上の講演会や講座を開いたのです。この講演会の写真の横断幕「家長学校講座」を御覧になって分かると思いますが、家長というのは親という意味ですね。この写真でも親たちに、どうやって子どもに読書を薦めるかということを話しているのです。

松居直先生は、数回にわたり、中国で絵本の講演をなさいました。会場は毎回、超満員です。多くの若いお母さんたちが自分のブログに、先生がお話になった言葉を克明に記録しています。あるお母さんが、講演を聞いた感想です。読ませていただきます。「拍手がしばらく止まなかったです。みんな言い尽くせない思いで胸いっぱいでした。これらの言葉は60年にもわたり、絵本の仕事に携わっている賢者、長老の真心を込めた声でした。」そして松居先生の話したこのような言葉を記録しています。「『子どもに本を読み聞かせて、素直に幸せと喜びを感じさせてあげましょう。』これは先生が素晴らしい子ども時代を経験した息子として、そして一人の父親として、自分の子ども、そして多くの家庭に贈って下さった最高のプレゼントです」。もし、中国の親たちに、一番賢い日本人は誰かと聞くと、恐らく皆から松居直先生という答えが返ってくると思います。先生の著作は中国

でたくさん出版されました。多くのお母さんが私に教えてくれましたが、彼女たちは松居直先生の容貌を見て安らぎを感じるのだそうです。中国の若いお母さんたちのアイドルなのです。

こちらは五味太郎先生。中国で、五味先生の本がたくさん翻訳されました。中国で講演を行われたこともあります。その映像はビデオになっていて、見たい人は、インターネットで何回も繰り返して見ることができます。

宮西達也先生には中国に3, 4回御来訪いただいています。上海図書館で1回講演をされたことがあります。そのとき私は司会者をしました。その講演会は有料で、私の記憶が間違っていなければ、299人民元でした—招待券もたくさんあったようですが。確か上海図書館の一番良いホールだったと記憶しています。宮西先生も中国で多くの人に人気のある、日本人作家の一人です。後ほど、どのくらい発行部数があるかお教えします。その数字は、恐らく、彼自身と出版社だけが知っている数字です。

私も講演をします—先ほどお話しした《图画书：阅读与经典》（世界の絵本、読書と名作）を書いた後のことですが—。《中华读书报》（中華読書新聞）が2008年8月6日に、「一人一本書和114場演讲」（一人1冊と114回の講演）という題名で記事を書いてくれました。その中に、このようなことを書いてありました。

「一人が1冊の本をめぐって114回も講演をし続けてきた。そしてこの数字は、国内で今までなかった数字で、しかもまだ続いている。最短では3時間、最長では6時間にも及ぶこの講演では、毎回、時には大きな笑い声、大きなすすり泣き声が聞こえる。しかし、席を離れる人は誰一人いない」。

中国で講演するとき、今の皆さんのように静かに講演を聞いている、ここのような会場はなかなかないです。気に入らなかつたらすぐ立ちます。若いお母さんは皆、細いハイヒールを履いていて、講演している目の前で、タタタタタと出て行ってしまふ。それで「私の講演では誰も席を立たなかつた」ということを強調してお伝えしたかったのです。日本の常識では講演中に席を離れるなんて、そんな失礼なことはないでしょうけれど、中国ではそのようなことがあります。

私の講演を聞いて「この講演は娘の一生と私の生活を変えてしまった」という方もいらっしゃいます。これは私に対しての励ましの言葉であるだけでなく、すべての子ども読書推進者に対する感謝の言葉です。しかし、私は何年か前から一切講演をしていません。今は自分の創作に専念しています。

実際には私は114回だけではなく、200回以上の講演をしました。中国ではこのような講演会を非常に盛大に行います。写真を御覧ください。私の絵本に関する講演会のチケットです。とても、丁寧に綺麗にできているでしょう。私はすべての講演会の入場券を大切にコレクションしています。私と共に、長い道を歩んできたのですから。

方法4 グループ活動

方法その四はグループ活動です。中国には、子どもの読書を推薦するグループがたくさんあります。もっとも有名なグループの一つに「亲近母语」（親近母語）というのがあります。「母国語に親しんでいる」という意味です。このグループは、とても特殊な存在です。主に小学校で読書推進活動を行うグループです。主に小学校の先生向けの推進活動です。毎年何回か大きな多岐にわたるイベントを行い、全国から 300 人から 400 人くらいの先生が 3、4 日間泊まり込みで一つのところに集まります。専門家の講演会もありますが、最も重要なのは、専門家を招いて話を聞くだけではなく、普通の小学校の先生が、学校でどのような読書指導をしているか、ここで実際に演習させているということなのです。興味ある方はこの「亲近母语」のホームページ⁶を御覧になってください。また、たまたま見つけたのですが、彼らの主催で去年行われた大きなイベント「第 7 回中国児童読書シンポジウム及び親近母語教育研修会」（第七届中国儿童阅读论坛暨亲近母语教育研讨会）のホームページがありました。この中のキャッチフレーズには、「中国で最も早く設立され、最も影響力のある子どもの読書の研究と推進の場」（創立最早，最有影响的儿童阅读研究和推广平台）とあります。

もう一つのグループ活動は「三叶草故事家族」（三葉草故事家族）です。故事というのはここでは読み聞かせのことで、「白爪草読み聞かせ家族」という意味です。多くの読書する家族を生み出すための推進活動を行う民間公益組織です。さっきの「親近母語」と同じように、自分のウェブサイト⁷があります。一番感動したのは、全国で 9,000 の家庭がここに加入しているということです。そして親たちがこのホームページやこのグループの活動に参加して、良いと思うと、また次の他の家族にも薦めるようにしているので、だんだんこの輪が広がっていきます。このグループは、お母さんのための読み聞かせ研修会や、専門家による読書会や講座、それから地域の読み聞かせ会を開いたり、またテーマ文化サロンや、新書試読会、毎年のお話コンテスト、お話劇団など様々な方法で活動しておりますので、もしお母さんたちがこのようなグループ活動に参加したら、絶対に悪い本やでたらめの本に出会う事を避けることができると思います。

もう一つ内緒の話を皆さんに教えます。中国の若いお母さんたちの秘密です。中国のお母さんたちは、気ままにネットで本を買ったりしません。他のお母さんのお薦め、耳より情報、そのようなものを聞いてから本を買うのです。

方法 5 電子メール

すべての出版社のメールマガジン—中国語では「电子报」と言います—を購読することが可能です。彼らは定期的にメールマガジンを発信していて、親たちに新しい本とお勧めの本の情報を提供します。優秀な出版社のメールマガジンをとっていけば、どんな本が優れているか、良くないのか、またどんな良い本が出ているか、が分かるので、騙されること

⁶ <http://www.qjmy.cn/> (accessed 2013-4-13)

⁷ <http://www.3yecao.org/index.php?sid=ci37Bb> (accessed 2013-4-13)

はありません。私もこのようにしてどんな本が出ているか知るようになっています。児童書が毎年4万種も出るといわれたら、全部読むわけにはいかないので選びようがありません。このようなものを読めば賢く分かります。

方法6 マイクロブログ

それから方法の6番目は微博（マイクロブログ）です。いま、中国では誰でも自分のブログを持っています。ブログは中国人の生活様式を変えてしまいました。皆職場に着いたら、まずブログを見ています。特に若いお母さんたちは、やはり読書推進のブログをよく見ています。出版社だけではなく、読書推薦者も皆ブログを持っています。

お見せするのは上海のポプラ絵本館のブログです。ここでどんな新しい絵本が出ているか教えてくれます。たまたま最近一番新しい本として出ていたのは、私の翻訳した《你喜欢谁?》（『ねえねえ』内田麟太郎 作、長谷川義史 絵）でした。

そして毎月一番よく売れた絵本がどれかも分かります。ここに載っているのは、ポプラ絵本館2012年10月のベストテンです。絵本のことをよく御存じの方であれば、トップベストテンはどれも日本の絵本だということがお分かりになるでしょう。

3 子どもたちは現在どんな本を読んでいるのか

日本の子どもたちが読んでいる本を、中国の子どもたちも読んでいる

中国の子どもたちは今どんな本を読んでいるのでしょうか。中国の子どもたちはもう『西遊記』だけを読んでいるわけではありません。彼らは中国の作家が書いた児童書も読みますし、他の国の優れた作品も読んでいます。実際のところ、近年、子どもの本の世界名作は、ほとんど中国語に翻訳されています。

具体的な例を見てみましょう。松居直先生の書いた本『松居直のすすめる50の絵本』は、中国語に翻訳されています（『松居直喜欢的50本图画书』）。先生はこの本の中で50冊の絵本を薦めてくれますが、果たして中国語訳は何冊ぐらい出たのでしょうか。なんと50冊のうち、36冊も中国で翻訳されています。36冊を少ないと思ってはいけません。多くは日本語の本で、まだ翻訳されていないものもあります。もし今回の講演の準備をすることがなければ、私でさえ、こんなに出ていると分からないほどでした。

これも日本で出版された本『英米絵本のベストセラー40』（灰島かり 編著 ミネルヴァ書房2009年）で、40種類の本を挙げていますが、中国では何冊ぐらい出たでしょう。中国語訳は33種類です。そうしたら御想像になれるでしょう、今、日本の子どもたちが読んでいる本を、中国の子ども達も同じように読んでいます。しかも、恐らく中国の子どもたちが読む本は日本の子どもたちの読む本よりたくさんあるだろうと思います、年間4万種も出ているのですから。それで中国の子どもたちはどれを選ぶか、本当に迷って困っています。

ここまでは絵本についてのお話でしたが、では、文学作品、読み物はどうでしょうか。

同じように『英米児童文学のベストセラー40』（成瀬俊一 編著、ミネルヴァ書房 2009年）は同じく40冊の児童文学を挙げていますが、中国では33冊が翻訳されています。

日本の作家の作品の翻訳は、本当に驚くほど多いのです。絵本や児童文学に関して言えば、中国と日本は仲良くなりたくなくても、仲良くなっています。宮西達也先生の本だけでも20冊以上翻訳されています—近日出版のはまだ数に入れていません—。一番よく売れたのは、『**《你看起来好像很好吃》**（『おまえうまそうだな』宮西達也 作絵）という本で、発行部数10万部になりました。

中国の親たちは、この絵本が大好きです。ある保護者が、このようなことをレビューに書きました。（ついでにお話ししますと、今お見せしているこのホームページのタイトルは、「豆瓣读书俱乐部」（豆板讀書クラブ）⁸といいます。（「豆瓣」は豆板醬の「トウバン」です。）「私はどの本を買うのにも、その前にまずこのホームページを見て、書名を入力して、他の人がこの本をどう評価しているか見てみます。ここには、出版社の宣伝文句はあまり載ってなくて、本当に読者の声だからです。ですから、この豆瓣读书俱乐部（豆板讀書クラブ）という名前を皆さんよく覚えておいてください。この保護者は本当に正直なことを言っていると思います。「温かい宮西達也さんは、この超癒し系のストーリーを、巨大な恐竜の上に描いたのです。私は80歳になってもこの話が好きでしょう。その頃私は、きっとあの赤い実の中に寝ている老いた恐竜になっているでしょう。」本当に中国でこの本が有名になっています。

中国で一番よく売れている絵本は、佐々木洋子先生の『くまくんのあかちゃんえほん』シリーズです。ケースの中に入っていて1セット15冊あります。中国語のタイトルは、『**小熊宝宝**』（こぐまの赤ちゃん）で、5年間で100万セット売れました。

それでは、親たちは、この「くまくん」がどれほど好きなのか見てみましょう。というのも、この佐々木先生のごことが、非常に羨ましいなあと思うからです。どうして100万セットも売れるのだろうと不思議に思っています。それでお母さんたちはなぜ佐々木先生の本が好きなのか、ちょっと調べてみたのです。あるお母さんはこのようなことを書いていました。

「どれほどこの本が好きかというと、私は一気に15セットを買いました。それぞれ新しいお母さんと、これからパパとママになる人たちにプレゼントしました。6か月以上の赤ちゃんにぜひお勧めです。読んであげてください。また、胎教の頃から、お腹の赤ちゃんにこれを聞かせたら、よろしいと思います。」

それで、私の本はなぜ売れないかよく分かりました。ちょっと年齢層が高すぎたのです。これから私も絶対赤ちゃん絵本を書こうと決心しました。実は中国でも、この0歳から3歳までの赤ちゃん向けの本を書いている人がいますが、一つ、分からない現象があります。中国人の書いた、0歳から3歳までの絵本で、売れているものは1冊もないのです。

⁸ <http://book.douban.com/> (accessed 2013-4-13)

日本の児童読み物も人気

皆さんは、中国で一番売れ行きの良い児童読み物はどんな本か、皆さん絶対想像がつかないと思います。中国の作家の書いた本と、外国の文学も併せてです。中国の Amazon のウェブサイト⁹で見てください。一番売れ行きの良い作品は、黒柳徹子さんの『窓ぎわのトットちゃん』（《窗边的小豆豆》）です。スライドの青い文字を御覧になってください。「9年連続、全国児童書ベストセラーのダントツ1位、100万冊突破」しかも、「中国9年義務教育小学国語教科書に採用」。しかし私が見るには、この本は、どちらかというとな大人向けの読み物です。日本でもこの本は児童書のジャンルなのではないでしょうか。

さて、読み物は絵本に比べてはるかに多く出ています。統計が取れないくらいの数字になっています。一つ例を見てみましょう。宮沢賢治は、皆さんおなじみの作家ですが、宮沢賢治の作品は、中国語訳はどれくらいあるか皆さん御想像できますか。21種類、こんなにたくさん出ています。この21種類のうち15種類は周龍梅が訳したものです。どの版も、彼女は精魂込めて推敲を重ね、訳文を検討していますので、全く同じものはありません。御覧ください、こちらの中国で出版された賢治の童話集は結構シックな感じでしょう。これらの3冊の本（《银河铁道之夜》（『銀河鉄道の夜』）、《座敷童子的故事》（『座敷童子の話』）、《要求太多的餐馆》（『注文の多い料理店』）いずれも周龍梅译 百花文艺出版社 2011年）は特別なものです。後ろで展示していますので、ぜひ手にしてみてください。

ある人は『銀河鉄道の夜』にこのような感想文を書きました。これも読者レビューの中の一つですが、テーマは「なぜ童話は私にこんなに寂しい思いをさせるのか」。賢治の作品は私から見れば、難解なのがこの特徴なのですが、意外にもこのような声があります。中国の読者がどうして彼が好きなのか、どのくらい理解しているのかを見ていただきたいと思います。読ませていただきます。

「子どもの時、『王子様はお姫様と一緒に末永く幸せに暮らすことになりました』というような童話をたくさん読み、幸せはこのように簡単に手に入れることができると幼い心の中で思っていた。しかし、ここにある悲しい童話は中年になった私の心をぐっと刺した。それは生まれながらの悲しみなのだと思感させられた。ああ、あの頃はまだ、寂しさや悲しさがどんなものか知らなかったし、幸せとは実は孤独と寂しさに満ちた美しい旅だということを知らなかった。」中国の読者の中に賢治の童話へのこんな共鳴があるとは、このレビューを読まなければ本当に分らなかったです。

最も多く読まれている中国の児童文学作品

言うまでもなく、中国の子ども達に最もよく読まれているのは、やはり中国の児童文学作家の創作です。中国で一番優れている作家は、曹文軒（曹文軒）先生だと私は思います。彼の代表作は《草房子》（草ぶきの屋根）で、『サンサン』という日本語訳も出ています（『サンサン』曹文軒 著、中由美子 訳、和歌山静子 絵 てらいんく 2002年）。日本の反響はど

⁹ <https://www.amazon.cn/> (accessed 2013-4-13)

うでしょうか。中国ではもう 100 万部を突破し、100 万の中国人を感動させた児童文学の名作とされています。映画化もされています。

次に多く読まれるのは、沈石溪先生の作品です。中国の動物小説王と呼ばれています。つい最近、沈石溪作品発行一億部と《狼王夢》(狼王の夢) 発行 100 万部のお祝い式典がありました。つまり、彼の作品は既に 1 億部は発行されました。《狼王夢》(狼王の夢) だけで、100 万部は売れているのです。

私もファンタジー小説をたくさん書きました。会場を後にする前に、是非後方で私の作品を御覧になってください。飛行機に乗せて、わざわざ持ってきたものです。これらはつい最近出版されたものです。しかし、私の全作品を合わせても、100 万部に届いていないですから、まだまだ頑張らなくてはなりません。

中国の子どもの読書の問題点

その 1 功利的な読書

中国の子どもの読書が、いま抱えている問題の一番は、功利的に本を読んでいるということです。功利的な読書とは、親たちが自分の子どもが児童文学作品を読むのをあまり望まず、その代わりに、学習参考書、作文集や問題集など勉強に役立つ本を読ませることです。功利主義の受験教育が指揮棒を振るようにして、子どもたちの読書する時間を奪ってしまうのです。

ある新聞は、このようなことを書いていました。あるお母さんは子どもに向けて「優秀作文選を読みなさい。作文を書く時に役立ちますから。」子どもは言います。「いやだ。私は読み物やマンガが読みたいです。」親子の日常会話ですけれども、多くの子どもが親にこのように干渉されて、いつのまにか本を読むのが嫌いになってしまいます。上海で行われた出版業界の見本市(第八屆上海書展)で、多くの専門家たちは「功利的な読書によって、子ども達の読書意欲を損なわないように」と呼びかけています。

《中国青年報》(中国青年新聞)の—これも、とても重要な新聞です—ある調査によりますと、8割の親が子どものために、本屋で学習進度に関連する参考書を買っています。ですから、今日の子どもの読書は、ますます功利化されています。子どもに学習参考書のようなものを買うのは、別に悪くはありません。いけないのは、親がそのほかの本を全部取り上げてしまうことです。

もう一つ別の報道を見てみましょう。「児童書は、学習参考書にかなわない」という話です。某書店の社長—大きな書店の社長さんです—の言うには、「現在、当店児童書の在庫は 2 万種あり、およそ 5 万冊近いです。」ただしこれは児童文学と学習参考書類を全部含めた数です。そして先月の販売量、売り上げの 20 位ランキングを見てみると、3 位までは全部英語の問題集でした。(補足として、スライドで紹介されたデータ:[2009 年] 2 月 26 日から 3 月 25 日までの児童書売り上げ約 7.6 万元、およそ 6,000 冊。学習参考書約 23 万元、およそ 14,000 冊)

その2 浅い読書

中国の子どもの読書の問題の二つ目は、内容の浅いもの読み物ばかり読んでいることです。ここ10数年、質の良くない通俗児童文学が盛んになり、文学性の高い児童文学を読む時間と空間が極めて圧迫されています。個人的に思うには、現在市場で流行している、いわゆる創作児童文学作品のほとんどが、このような内容の浅い読み物ばかりで、本当の意味での創作児童文学作品ではありません。上海で2009年4月に発表された「上海青少年媒体素养调查报告」（上海青少年メディアリテラシー調査報告書）の中では、こうした内容の浅い読書の傾向は生徒たちの考えを単純化、単一化し、いずれは生徒たちの選択力の理解力、判断力を弱めてしまう傾向があることが指摘されています。ですので、私は読書を絶対に娯楽化させてはならないと思います。内容の浅い読書ではなく、深い読書をすることを呼びかけなければなりません。

任重くして道遠し。これからも私たち子どもの読書の推進者や作家、学校の先生、それに親たち皆で協力し合い努力していけば、きっと子どもたちのために、より良い読書環境が創り出せると思います。

どうもありがとうございました。

■ 質問から

1. 子どもの読書事情に関すること

地方の子どもたちの読書事情について

これは今最も深刻な問題だと考えています。今のところ、対策は民間団体の力に負うところが大きいです。中国の多くの地方では小学校さえありません。このようなところでは読書推進といっても、それ自体難しいことです。このような地方の子どもにとっては、児童書よりも、まず小学校のほう重要です。中国では「希望小学」という活動があり、民間で寄付を集めて小学校を作っています。また、多くの民間団体や企業がこのような子どもたちに本を買ったり送ったりしています。しかし、こうした地域の子子どもたちが都会の子子どもたちのように読書ができるようになるまでは、まだ何年もかかると思います。引き続き努力していかなければなりません。なお、「本を送る」ということ自体については、郵便でどこへでも届けることができます。

中国では、小学生になると本を読まなくなるのか

講演の中では説明が不十分だったかもしれません。中国の子子どもたちは学校に上がると本を読まなくなってしまうのではなく、本の読み方に問題があるのだということです。

中国では小中学生から競争がとても厳しく、小学5、6年生になると学校の宿題や受験の準備などに時間をとられるようになり、児童書などは読まなくなってしまう。しかし

小学 1, 2, 3 年生にはまだ児童書を読む時間があるはずですが、4, 5 年生もまだ時間があります。私が書いている本は、彼らが読むためのものです。面白く優れた本があれば子どもたちは読んでくれます。

私が先ほどお話しした、「功利的な読書」というのは、子どもの問題ではなく親の問題です。そしていわゆる「浅い読書」は本を読まなくなるのではなくて、読書の質の問題だということなのです。

中国の学校図書館事情

都市の小学校には、みな図書館があります。ただし問題があります。一つは資金が不十分なことで、もう一つは図書館員の専門性が低いことです。彼らはどんな本を買うべきかわかっていません。日本ではありえない話ですが、聞いたところによれば、彼らは費用は少ししかもらえないのに、たくさんの本を買うように要求されているのです—子どもの数が多いですから—。それで、彼らは出版社から古い本や安売りの本などをたくさん買います。それらの本の内容はあまり良くないものが多いです。私は日本の児童書を翻訳するときよく本の表紙に「学校図書館の推薦」（全国学校図書館協議会推薦図書）などと書いてあるのを見かけます。このようなものがあると良いと思いますが、中国ではこのような組織はありません。それで、民間の団体で「小学校図書館必読 3,000 種図書」などを出しています。

中国の「読み聞かせ」事情

中国では、一部の絵本が大好きなお父さんお母さんは子どもに読み聞かせをしますが、多くの方はそもそも絵本がどんなものかを知りませんので、どうしようもありません。なぜなら、中国のお父さんお母さん自身が小さいころ絵本を読んだことがないからです。私の知人に小さな子どもがいるので、絵本をプレゼントしたら、自分で読んであげるのではなく「おじいちゃんとおばあちゃんに読んであげるように言った」と言われてびっくりしたことがあります。私は「自分で読んであげてください」とその人にもう一度手紙を書きました。

それから、日本と違って中国のお母さんはほとんどみな仕事をしています。専業主婦のお母さんは非常に少ないです。お母さんたちは夜家に帰ってからも食事の支度をしなければなりません。するとすっかり疲れてしまって、子どもに本を読んであげる力はもう残っていないのです。家庭ではこのような状況ですが、最近では多くの本屋さんに子どもに絵本を読み聞かせしてくれる大人たちがいます。

2. 中国の子どもの本に関すること

優れた本を見付ける方法について

どのような本を選べばよいか、これは難しい問題です。中国では日本と違って絵本を出版するとき「導読」（読み方ガイド）の紙を挟んでいます。この本はどんな本でどのように

読むか、どのようなところが優れているか、などが書かれています。つまり出版社は自分のところの本はみな優れていると言いますから、中国では全部の本が優れているかのようです。

それから中国で本を出すとき、本の裏表紙にはよく作者の履歴を載せます。どんな賞をとったか、どんな作品があるかなどで、これは一つの参考になります。それから新しい本が出る時研究者や専門家が書評を書きます。そのほか良書を推薦する本、例えば研究書などによって判断する方法もありますが、やはり本が出てから時間がかかるように思います。良い本を見分けるのは本当に難しいです。中国作家の読み物でしたら親たちは割合早く判断できます。中国では最近よく、同じ作家の本を一年間に10何冊も出すことがあります。私の考えではそのような本や作家はあまり良くないです。

中国の子どもの本によく見られる「教育性」「説教性」について

そもそも、絵本がブームになったのはこの5、6年のことですので、中国の絵本作家は経験がありません。それに、出版社の編集者もどんな絵本が良い絵本かということをよく分かっていません。そのため優れた絵本を作るという発想がまだない、要は歴史が浅いということが問題なのだと思います。また、このような絵本ブームが現れる以前の、従来の出版の方針として、たとえ赤ちゃん絵本であっても教育性、説教性はなくてはならないものという考えがありました。先ほどお話した「くまくん」のシリーズが100万セットも売れるというのは、この反動だとも言えます。もし中国人が書いた赤ちゃん向けの絵本を探すなら、たとえば当当网で児童書の0歳から3歳のコーナーを見ればたくさん見つけることはできます。たくさんありますが良いものを見つけるのは難しいです。一つの方法は読者のレビューを見ることです。お母さんたちは本当の話をしますし、良いものは良いといますので。

もしお知りになりたければ、一つ文学賞をお教えします。中国には「丰子恺图画书奖」(豊子愷絵本賞)¹⁰という賞があります。丰子愷は画家の名前です。この賞はこの何年か(今年は3回目になる)出ている、受賞作も数十種あります。私の見たところ、これらの受賞作は全て教育性や説教性のない、良い作品です。

とはいっても、このような教育性や説教性のある本は確かにたくさん出ています。くれぐれも注意して本を選んでください。

世代で読書体験を共有できるような絵本が中国にはあるか

非常に残念ですが、中国の絵本はまだ歴史が浅いので、私の記憶の限りでは、そのような絵本はまだないと思います。文学作品ならばあるのですが。まだ努力しなければなりません。

しかし今後については間違いなくそのようなものができていくと思います。中国の絵本

¹⁰ <http://www.fengzikaibookaward.org/> (accessed 2013-4-13)

作家はとても賢くて腕がいいのです。今までこのような状況にみんなの関心が向けられていなかったのですが、今では絵本に関する見方が養われてきていますから、優れた作品が誕生するのは難しいことではないと思います。特に若い世代から優秀な作家が必ず出てくるでしょう。時間がかかりますが、あと10年もすれば、みんなで共通の話題にできる絵本がきっと増えるでしょう。ここ数年中国の作家から本当に優秀な絵本が出てきていますので。

中国のネット書店はどうしてこんなに安いのか

法律上の制約がないので、こんな競争になっていると思います。読者は喜びますよ、安いし、たくさん本が買えますから。しかし、こんな状況が続いていけば、出版社が倒産してしまうということを、皆知っています。中国ではこのような「電子商業」競争がものすごく激しいです。こんな例もあります。あるネット書店では出版社に本を全部自分のところに売らせ、他のネット書店には卸さないよう要求するのです。

このような現象を改善していこうとするなら、法律の介入が必要でしょう。今のところどうしようもありません。

それから、中国では国慶節や中秋節などの祝日に、ネット書店がめちゃくちゃな割引をするのです。皆さんが想像できないほどの割引です。ですから多くの人はその日を待って本を買っています。

3. 翻訳に関すること

翻訳者はよい本の情報をどのように得ているのか

皆さんは私が自分で翻訳したい本を出版者に推薦しているのだとお思いでしょうが、そうではないのです。中国には著作権エージェント会社がたくさんあり、日本の出版社はそのような会社を通じて、優れた本を中国の出版社に推薦しています。出版社はそれらを私のところに持ち込んで来るのです。もちろん、私自身も自分が良いと思った本を出版社に推薦することもあります。個人の力では限りがありますので、多くの場合このような方法がとられます。

本を購入することに関しては、たとえば中国の Amazon でも日本の絵本や本を買うことができますし、アメリカで出版される本も大部分は購入可能です。ただし値段は高いです。このほか、本の購入を代行してくれるインターネットのサイトもあります。

翻訳するとき気をつけていること

翻訳の過程で、言葉を選ぶことは非常に難しいです。私は、翻訳するとき文字だけを置き換えるのではなくて、本のフィーリング、感じ方を大切にしています。そのほか、絵本を翻訳するとき必ず頭に置いている一番大切なことは、絵本は子どもが自分で読むものではなく、お父さんお母さんが子どもに読んであげるものだということです。だから翻訳は

お母さんが気持ちよく読んであげられるものでなくてはなりません。ですので私は1冊の本の訳文を仕上げから、たくさん子どもたちに読み聞かせをしています。

かつてこんなこともありました。ある出版社の編集者が、あるとき、私に連絡せずに、私を書いた字句を書き換え、ひどいときには文章ごと削ってしまったのです。こういうことはよく起こることです。それで今では私は出版社と、私の文章を勝手に変更してはいけない、変更するときは必ず知らせること、という契約を結んでいます。勝手に変えられるのは困りますが、編集者と話し合い、一緒に良い訳本になるよう相談しながらやっています。

実は一先ほど言いそびれましたが一私にとっても翻訳の過程、作業は非常に良い勉強になっています。絵本を翻訳した御縁で、私もこれからポプラ絵本館と協力して絵本を出版しようと思っています。ここで皆さんに保証します。私の絵本には絶対、教育性や教訓性はありません。実際に、このような教育性、説教性のある本は中国でもあまり人気がないのです。

(この講演記録は録音をもとに、国際子ども図書館企画協力課で編集・構成したものです)